

撃による火柱が花火のように夜空を染めていました。

危機一髪で死線をすり抜けた運命を感じました。

モゴックには十ヵ月駐留、警備をしましたが、その時の隊長は小倉少佐で、辻参謀も途中で部隊に立ち寄りられましたので、一晩泊めていろいろ話しを聞きました。

部隊では防諜の関係上、作戦漏洩を防ぐために現地人を一個所に集め、主食の米やその他の食糧を与えました。虐待等の行為があれば私も戦犯でしょうが、割合に厚遇しましたのでそのようなことはありませんでした。

その後、菊の第百十四連隊と共に後方に退りました。死の街道といわれたモチコウザンを行軍。朝出発しましたが敵の空襲を受け、私は小隊の先頭を行進していましたが最後尾を追従する小隊からは三名の戦死者が出ました。雨の中、風の中を踉蹌として夜道に足をとられながら進んで行く悲惨な状態で、時として敵の戦闘機の偵察、機銃掃射に対応しながらの撤退でした。

その後シタン作戦に参加しました。シタン河周

辺はジャングルと湿地帯で、しかも川の流れば速く、作戦行動は困難を極めました。これが、作集団の撤退作戦の援護でありました。その後ラングーンに撤退集結、武装解除、俘虜収容所入りとなりました。

昭和二十一年七月、ラングーンを出発、七月十二日大竹港に入港、上陸、召集解除となりました。思えば、菊兵団はビルマ戦でも最も苦勞し、犠牲も多かったが、私が参加したのは、進攻作戦ではなく、撤退作戦でしたので、その悲惨さをつくづく感じたわけがあります。

ビルマの助人部隊 雲南から死の撤退

兵庫県 後藤 廣 治

―後藤さんは兵庫生まれで、ビルマ生き残りだそうですが、何師団でしたか。

私は、兵庫県水上郡和田村四谷で、大正九年一月十四日生まれ、旧姓は中原といいました。昭和十五年徴

集兵ですが第二乙種だった。仲間は皆、軍隊へ行ったのに召集が来ない。ところが昭和十八年四月一日、召集令状が来て、大正十一年生まれの現役兵と一緒に入った。現役要員の補充的なものだと思つたし、隊での扱いは現役兵と同じ教育だった。

入隊は丹波篠山の旧歩兵第七十連隊の跡で、中部第一六八部隊だった。教育は六ヵ月程だった。当時は私的制裁撲滅運動中だったが、昔から篠山連隊は健脚部隊として訓練の厳しい所だったので私的制裁も厳しかった。容赦なくビシビシやられたため、兵役免除になつた者もいた。中でも私の第一機関銃中隊長は松実中尉といつて、士官学校出身の現役バリバリで、特に教育は厳しかった。

十月頃になつたら部隊は朝鮮へ移動することになつて、軍旗と共に大邱へ行き、通称号・朝鮮第二十四部隊となつた。大邱では、昭和十九年六月に大動員があつて、第四十九師団が編成され、部隊は歩兵第六十八連隊（狼一八七〇四部隊）となつて、大半の者が行先は判らないが、狼部隊として移動した。

南方ではないかという噂もあつたようだが、釜山出港、博多、台湾の基隆からフィリピンへ着き、三日程停泊し一寸上陸した。ボルネオ沖を航行し、何回も潜水艦の雷撃を受けながら辛うじて一ヵ月してシンガポールに着いた。

しかし、その輸送中は随分の苦勞でした。輸送船は「宇賀丸」で人馬共六千で、一人の座席は僅かで、立膝で身動き出来ず、便所の中まで一杯だった。我々機関銃隊の馬は船倉にいる。それから飲料水も少なくなつたが、馬は運動せず、水を飲まなければ疝痛を起こして死んでしまう。そのため機関銃隊の我々は船倉の中で、繋いだまま前進、後退の運動をしていた。私たちは当番の時は、馬用の水をグーッと飲んで渴きをしのいでいた。

馬に水が少ないのだから当然、船倉に押し込められている兵隊も水で苦勞した。飲料水一日分は飯盒の蓋一杯だけで、それは甘露の水のように美味かつた。このためいろいろな疫病で死んだ者もいたが、水葬というより死体を投棄するという悲惨な状況もあつた。

「宇賀丸」は武装の無い貨物船で、木製のこけ舂しの大砲がつけてあるだけだった。部隊の各隊を二つに分けて二隻の船に乗船したが、一週間後に出発した船はボルネオ沖で雷撃でやられた。その船に乗っていた誰々が死んだとか、一週間近くも泳いでいたとか聞いたが、ほとんど海没してしまつたようだ。

先に申したように無事着いたシンガポールに約一ヵ月滞在した。そこはコーヒーあり、砂糖ありで、航海中の地獄と比べれば極楽だった。続いてタイに入り、いよいよビルマへと出発した。

― 目的の地はビルマだったわけですね。もうその頃は泰緬鉄道は完成していたのですか。

泰緬鉄道はほぼ完成していたが、破壊された所もあるため、途中歩いたり乗ったりして終点まで行つた。しかし、その間、敵機の機銃掃射を受けると乗務員は現地人なので直ぐ逃げてしまう。銃爆撃がおさまればまた帰って来て運転をする。従つて約一週間ぐらいかかった。

終点からは普通の列車に乗り換えたような記憶があ

る。ペグーからマンダレーまで行つたような気がする。雲南近くのバーモまで行つてそれから中国領に入つて芒市、龍陵、騰越へ行つた。そこは第十八師団（菊兵团）、第五十六師団（龍兵团）が重装備した中国軍や連合国軍の包囲を受け大激戦をしていた。

狼兵团はその助人として到着し、我が第六十八連隊も大苦戦で、第三中隊などは四、五人しか残らないでほとんど全滅した。私は太郎山（日本軍が名付けた）の戦闘の最中、英軍の自動小銃で左大腿部貫銃創を負つた。その戦いは筆舌に尽くしがたいものだった。

ということとは、敵は飛行機で山へガンソリンを撒き、それに曳光弾をボンボンと射ち込む。そのため山を全部焼き尽くすので死体は黒焦げになる。山へ集中攻撃をするので身の置き所無しである。

弾がドンドン飛んできて、あちこちで「ウン」「ウン」と言つて死んでしまう。全滅状態です。その戦闘で私は重機関銃の三番射手だったので最後まで射撃して退した。その際、身を顧みず死守したので、部隊では殊勲を申請したので、金鷄勲章間違いないといわれて

いた。

話しが一寸さかのぼるが、私の機関銃中隊長の思い出を。芒市で行軍中のことだが、喉が渴いているだろうと、兵隊に梨を取りにやった。その部下たちが、集中攻撃を受けて全滅してしまつた。中隊長は「戦場でなく戦死させてしまつたのは自分の責任である」と、正装し東方を向いて自決した。「バーン」という音がするので当番が見に行つたら既に死んでおられた。

私の大腿部盲銃創のことと、その後の行動について話をします。その時隊長の死んだ状況を思い、このままでは出血多量になるのでタオルを腿に巻き万力をかけ捻り止血をしたが、そのままホカされて、救護隊も何も来やしない。戦闘の後、そういう人が沢山いた。

そのうち私は精神的に頑張らなければならぬと覚悟し「お、い水を呉れ」などと怒鳴つたりしていた。ビルマは半年乾季、半年雨季の気候だが、もうその時は雨季になり、水にびしょ濡れの中、一個の握飯、泥だらけのを食べたが、何と美味かつたことか。

そのまま三日も、ジャングル中に放られていたが、

そのうち救援隊が担架みたいな物を持って来て「兵隊いないか」と言う、その声を聞いて「ここに居る、早く助けてくれ」と言つて助けられた。

救援所といつても、そこは野戦病院でも何でもない。中には我々のような負傷兵ばかり多い、若干の衛生兵は居てもテントも無い。私は止血の状態のまま置かれた。左はズボンを半分切り、靴は左足のは脱いだままで、動けぬまま放置されていた。

そんな負傷兵が三人、五人と固まり合つていた。しかし、その兵隊たちは毎日栄養失調と病気で死んでいく。ただ気力、精神力だけで生きていた。それでも歩けないから、臂をついて後向きに進みながら移動する。衣服は無いと同じ、その姿で下つていったが、下る間に傷が化膿したので下半身の傷口を、毎日その都度膿を絞り出す。繃帯代わりにチークの葉で傷口を縛り、一時冷やして楽になる。その時傷口に湧いている蛆虫を木の箸で取る。それが日課である。昼間はジャングルの中でじっと寝ている。敵に見付かれれば銃撃される。その間は雨季なので、雨露をしのいだことは一日も

無かった。家の中へ入ったこともない、ジャングルの中だけだ。食料はというと、ビルマの農家は米を糶のまま貯蔵しているので、糶を取って鉄帽の中に入れて搗き、手の上で殻を吹き、野草と共に粥を炊いて何とかしのいでいた。米は僅かでも取れたが塩はまったく無い。宝のように袋に入れてある岩塩を舐めて生きていた。

もうその頃は帯剣も兵器も無く、飯盒と凶囊だけで水筒も無い。元気な兵隊が皆持っていてしまった。骨肉の争いのようだ。「元気かね」といつて持って行ってしまふ。しかし、元気な兵隊が鷲鳥や水牛を獲ったりして分けて食べたり、野雉、蛇などは自分で取り野草と一緒に食べ何とかしのいでいた。

一水や食料はともかく、病気の方はどうしましたか。狼兵団は北からメーカーラに向かって南下というか撤退したというのですか、その苦勞話を。

マラリヤは何とかしても、アミーバー赤痢にかかり、一日に何十回も便意があり、粘血便で、悪臭だ。葉が無いので竹を焼いてその炭を粉にして飲む。炭で粘液

を吸収して癒す。それより方法が無かった。

寝ている傷病人が「助けてくれお母さん」とか、奥さんらしい人や子供や誰なのか判らぬ人の名前を呼んだり、「お母さん下駄を持って来て」とか、精神が半分おかしくなって死んでいく者もいる。私は精神的にも強く、ある程度体力があったので奇跡的に助かった。

あらゆる兵隊が芒市や竜陵など奥地から後退して来た。後に残った兵隊は未だ、隊をととのえて統制がとれ、元気な者は部隊から「下れ」という命令があつてメーカーラに集結した。私は負傷したので逆に助かったのかも知れないが、部隊は軍旗も焼き徹底的に敗北し全滅した。私たちは早い時期に騰越から退き、芒市付近で負傷した。それから後ずさり、いざりながら、行く方向が判らないので、何処の部隊か判らぬが友軍について行くだけだが、まさに奇跡的だった。

前の繰り返しになるかも知れないが、患者収容所では、雨露のしのげないジャングルの中、三々五々に置かれ、後は「自活せよ」と言われただけ。軍医も衛生兵も居ない。自分の我流で治療をしていたが、毎日、

昨日の友の十人が八人になり、翌日六人、また三人と減っていく。また残った者同志が、お互いに助けあいグルーブを作り、その中でまた死ぬ者もいる。

―ビルマの撤退も大変だったわけですが、軍隊機能を持って部隊行動した者と、個々別々に下つていった人々があるわけですね。末期的な状態の時のご苦勞をさらに。

他の部隊、菊（十八師団）龍（五十六師団）祭（十五師団）壮（五十五師団）狼（四十九師団）の兵隊が混成で、軍隊機能は無く、兵一人一人が個々の行動。それも昨日まで生きていたのが今朝死んだとかで遺骸など埋葬出来ない。屍の山だから、遺骨にして持つてもいけない。火葬にすれば煙で敵機に狙われる。そして、その兵隊が何処の誰だか判らぬのだから、私は自分の体力を支えるのが精一杯で、段々と撤退していった。

負傷したのは二十年の一、二月頃だったから、それから半年ぐらい、いざって生活し、下つていったわけです。各自バラバラで泰のナコンナヨークという所へ

辿り着いたら、野戦病院らしいものがあつたが、電気、水道もなく葉も何も無い、たまに現地米を配給してもらつたりしたが、前と同じような生活をしていた。

終戦を聞いたのは泰のナコンナヨークだった。その時、うちの部隊の人は一人だけで岡山の人で、今でも交流している。戦地へ来て二年以上風呂に入っていないから、シラミが真黒に付いていて、かゆくて仕方がない。洗濯もせんし、ひげも髪も伸び放題。

終戦らしい「爆撃もないなあ、機銃掃射もないなあ」ということで、ドラム缶を探し、帯剣を持つている者が、蓋を切り開けて風呂を焚いた。先ず衣服を全部煮沸したら、シラミ、垢、脂が薄水のように浮いていた。それまで飛行機が来ない時、火を焚いてシラミを殺し、衣服を手で洗って太陽乾燥しただけだったからだ。

風呂に一人一人入ったら水をホカし、また沸かして次の者が入る。その晩は天国にいったような気持ちになつた。敵も来ない、これで家へ帰らんで死んでもいいとさえ思った。

負傷から終戦までいざり、ナコンナヨークで「負傷

者は来い」というので、シラミも落し、傷口の蛆もとれ、軍医に見てもらったら、「このままでは内地へ帰っても足が曲がったままになる」というので、軍医は兵三人程に私を押さえつけさせ足を引く張った。痛くて三日間も眠られぬ、それでも足が曲がるようになった。

その後、弾丸をメスで摘出できるというので、麻酔注射もなく生のまま、兵五人で押さえて切開した。悲惨なもので、拷問か処刑のようなもの。消毒薬も沃度チンキと他の薬品、繃帯もなく手術した。

その時、十五軍司令部軍医から「機能障害」の証明書を書いてもらったが、戦後大阪で大切な仕事の金と一緒に証明書を取られてしまった。その後申請したが恩給局で却下された。実際は現認証明書を貰っていたのに、何もかも駄目だった。

ナコンナヨークで十五軍司令部所属になり、そこで待機して、内地送還のためバンコックへ集結した。帰国は昭和二十一年七月十日頃だったと思うが、米軍のLSTに乗船して神奈川県浦賀に着いた。そこで、

DDTを頭から掛け消毒され、復員手続きをして兵庫へ帰った。

―ビルマでは部隊もバラバラになってしまったようですが、戦後の戦友交流はあるのですか。

毎年、狼部隊の戦友会があり、高野山で慰霊祭を挙行している。また機関銃隊の戦友会もやっている。平成元年に歩兵第六十八連隊の慰霊碑を原隊の篠山に建てた。二百万円の予定が五百万円の浄財が集まり、戦死された吉田四郎連隊長の娘さんや生存者で盛大に開眼式（入魂式）を挙げた。全国から百人程参列した。私は毎年三―五回、有志三―五人ぐらいでポランテニアとして清掃している。見向きもせぬ人もいるが何時も奇麗にしているし、今年五月慰霊祭も挙行了した。私は元気で帰られ、有難いので、ビルマへ行つて戦没者の霊を慰めようと、平成二年二月、有志八人でビルマ各地を慰霊巡拜した。メイクテラ、メーミョウ、マンダレーなどを歩いて廻った。全行程、ビルマだけで十三日ぐらいだった。

ビルマの今日は、戦前の日本よりまだひどい。農村

にはガス、水道もないようで、T.V、冷蔵庫も無い。

ホテルの冷暖房も充分でなかったし、蚊や蠅も殺虫剤や蚊帳が必要だった。社会主義国のみじめさをはつきり見て来た。しかし、ビルマ人の八五%は仏教徒で対日感情はよいし、東洋民族という感情もあるのだろう。

戦前は英国の植民地だったので、年齢の高い者は、日本のお蔭で、日本の兵隊のおかげで独立出来たと感謝していると思う。若い者は社会主義国しか知らぬから、これからドンドン行って開発援助し、我々日本の行動を理解してもらう必要があるだろう。

各部隊は各地に慰霊碑を建てている。マンダレーの碑には吉田連隊長の娘さん、我々の小沢辰男会長の名前も刻まれてあった。我々は何回も行った人に先導してもらい慰霊した。そこへ行ったら「オーイ来たぞ、日本は良くなったからな」と涙を流しながら叫んだ。狼部隊は最後の助人で、新鋭強力部隊といわれながら特にひどい犠牲を負った。

勿論、他の部隊もひどかった、インパール作戦もイラワジ会戦、雲南攻撃も随分無理な作戦だったと思わ

れるし、特に昭和十九年後期から終戦までの撤退は悲惨だった。話しが前後したり、記憶も薄れたので、充分お話することが出来なかったが、資料で補充して下さい。

【解 説】

第四十九師団は昭和十九年五月、京城で編成される。七月二十七日から鉄道輸送により逐次ビルマに入り、最後尾の入緬は十月三十一日。

当時、ビルマ方面軍は第三十三軍を以て雲南で、「断作戦」を実施中であり、第四十九師団から左の兵力を雲南戦場に増強し第三十三軍司令官指揮下に入れた。

吉 田 部 隊

長 歩兵第六十八連隊長 吉田四郎大佐

歩兵第六十八連隊、山砲兵第四十九連隊第二大隊（第六中欠）、工兵第四十九連隊第三中隊、師

団通信隊無線一分隊、輜重兵第四十九連隊第三中隊（三分の二欠）、師団衛生隊三分の一。

吉田部隊は急遽雲南に前進し、戦闘したが、さら

にメークテラーの危急のため転進、敵機甲部隊と交戦して大損害を受け、連隊長吉田大佐は戦死（二十年三月二日）。残余の兵力は戦場を脱出して逐次サジに集結したが、すでにその戦力はなかった。

第四十九師団のメークテラー会戦（三月十日―四月十三日）の損害（戦病死者数は不明）は左のとおり。

戦死 四、一五〇名 戦傷死 一〇名

戦傷 七五三名 計 四、九一三名

三月三十一日現在の戦力

歩兵第六六連隊 九五七名

歩兵第六八六連隊 五五三名

四月十日夕までに掌握した戦力

歩兵第六六連隊、百六十八連隊、計約六百名

山砲 一門 師団総人員 千六百名

第四十九師団編成内容

歩兵第六六連隊、歩兵第五十三連隊、歩兵百六十八連隊、騎兵第四十九連隊、山砲兵第四十九連隊、工兵第四十九連隊、輜重兵第四十九連隊、第

四十九師団通信隊、兵器勤務隊、衛生隊、第一野戦病院、第二、第四、病馬廠 防疫給水部と完全編成の新鋭部隊一万二千名が、残存兵力二千以下となつてしまつた。

吉田連隊長戦死までの経緯

インパール作戦が失敗し、第三十三軍が攻勢に転じたが、十九年九月七日拉孟、九月十四日騰越の守備隊は玉碎、平戩、竜陵はようやく囲みを解いて脱出、救出することが出来た。

これによつて大本営は、援蔣ルート遮断企画を放棄し「南部ビルマの要域を確保せよ」と南方軍に命じた。昭和十九年一月下旬には、援蔣物資を満載した自動車群が、続々とインドから昆明に向かつて中国領に入つていった。これはビルマのランゲーンを十五軍が攻略した十七年三月から数えて約三年にして援蔣ルートが再開したことになる。

次にイラワジ会戦となるのだが、この時のビルマ方面軍の兵力（左記）はもう往時の力を失つていた。

第十五軍Ⅱ第十五師団（祭）約四千名、第三十一師団（烈）約六千三百名、第三十三師団（弓）約四千三百名、第五十三師団（兵）約四千八百名、第三十三軍Ⅱ第十八師団（菊）約七千二百名、第五十六師団（竜）約六千五百名、第二十八軍Ⅱ第五十四師団（安）、第五十五師団（杜）、軍直轄部隊の合計約四万名。

ビルマ方面軍直轄Ⅱ第四十九師団（狼）約一万一千八百名、総計八万四千九百名

しかし、当時日本軍は既に制空権を失い、英印軍の広範な動きを察知出来ず、結果的にはイラワジ会戦は失敗、メークテラ方面の敵を撃滅する作戦に転換することになった（第十五軍の強引な案に方面軍も同意）第四十九師団は方面軍直轄のままメークテラの攻撃に向かわされていた。

雲南戦線からはるばる駆けつけてきた第四十九師団の吉田部隊（歩兵第六十八連隊長吉田四郎大佐指揮）は、二月二十七日の夜メークテラに到着して、やっと防禦戦闘に間にあった。

翌二十八日朝から、英軍は激しい砲爆撃と共に一斉に攻撃に移り、飛行場部隊を撃破し、戦車と共に東、西、北三方からメークテラ外周陣地に迫った。二十八日は、守備隊の奮戦によって撃退した。

三月一日、朝から航空機の盛んな銃爆撃に支援された英軍の激しい攻撃が再開された。各部隊は来攻する戦車に対し果敢な肉迫攻撃を反復した。

しかし、各方面の陣地は破壊され、死傷者が続出した。吉田部隊は、陣地を交換し、一日は湖西地区で戦闘を続けていた。

三月二日、約二十両の戦車を伴った敵は吉田部隊の陣地を蹂躪し、一四・〇〇ころ、吉田連隊長は戦死した。吉田部隊の山砲兵大隊は山砲二門を破壊された。英印軍はさらに市街地深く進入し、第二野戦輸送司令官柏谷留吉少将の抛る防空壕にも手榴弾が投げ込まれた。

日本軍は頑強に抵抗を続けたが、圧倒的な敵の火力は、次々に日本軍の陣地を陥し、市街地も破壊した。吉田部隊の連隊本部、第二大隊の残部は二日夜、

戰場を脱出してピヨベ(メークテラ南東二五キロ)へ向かい転進をした。

翌三日、一〇・三〇ころ戦車二十数両を伴う敵は再び四周から市街地に進入した。吉田部隊の歩兵と山砲は湖西地区になお止まって戦っていたが、日没までに全山砲が破壊され、歩兵第二大隊は壊滅的な損害を受けた。

メークテラは三月三日日没までに完全占領されてしまったが、ペグー付近から救援に駆けつけた第四十九師団主力と、第三十三師団歩兵二百十四連隊基幹の作間支隊は、共に防衛戦に間に合わず、第十五軍司令部が付近に到着したのは翌四日未明だったという。

メークテラ防衛に当たったのは四千名であり、吉田部隊以外は兵站部隊、航空基地隊、通信隊、入院患者、兵站滞留員で部隊の性質上戦闘力に期待はもてなかった。

このようにして、ビルマの助入、第四十九師団狼部隊の歩兵第六十八連隊(吉田部隊)は、十九年五月

編成以来、ビルマ戦線に投入され、急遽、中国雲南省の断作戦に参加し友軍の撤退を助け、二十年二月末、メークテラ救援のため孤軍奮闘し壊滅的な打撃を受けた。その中の一兵士としての後藤廣治さんの、負傷でいざりながら、ビルマ南部、タイまでの奇跡の撤退行であり、戦後五十年にならんとする今日、亡き戦友の慰霊に心を尽くしていることに肝銘するものである。

狼第四十九師団防疫給水部

末期ビルマ撤退

長崎県 村山 由太郎

―徴集年次は何年です。何処へ入隊されましたか。

昭和七年徴集ですから、明治四十五年七月九日長崎市で生れ、兵隊検査で補充兵でした。昭和十六年七月十六日、輜重兵第五十六連隊に召集されました。例の関特演召集でほとんど大正生れだったと思うが、七月